

なぜ日本人には「チャレンジング行動」という 用語の理解が難しいのか ——認知症のBPSDに対する介入における パラダイム・シフトの核心——

Why is it difficult for Japanese people to understand the
term of “behaviors that challenge”:

The kernel of a paradigm shift in intervening BPSD for persons with dementia

武藤 崇¹

Takashi MUTO

要 約

本稿の目的は、「チャレンジング行動」という用語が含意する、認知症のBPSDに対する介入におけるパラダイム・シフトの核心を明確にすることであった。そのため、本稿の構成は、1) Challengeという英語から「チャレンジング行動」を検討する、2) 学術的な「チャレンジング行動」の含意を明確にする、3) 認知症のBPSDと「チャレンジング行動」の使用に関する動向を検討する、4) James (2011)による「チャレンジング行動」の定義からの示唆を明確にする、となっている。結論として、チャレンジング行動そのものを「主体」として(擬人化して)焦点化し、その上で、認知症の人と、その周囲の人たちが、協働して取り組む課題として捉えることが、当該のパラダイム・シフトの核心である、ということが明確となった。

キーワード：認知症、チャレンジング行動、BPSD、日本人

緒 言

認知症の行動・心理症状 (behavioral and psychological symptoms of dementia ; 以下、BPSDと表記する) の定義は、国際老年精神医学会 (International Psychogeriatric Association) によって、「認知症患者にしばしば生じる、知覚認識、思考内容、気分または

行動の障害による症状 (symptoms of disturbed perception, thought content, mood or behavior that frequently occur in patient with dementia)」とされている (Finkel & Burns, 1999)。このBPSDにおける「症状」という用語は、医学的な発想に基づいており「同年齢の健常者には通常はみられない、異常な状態」というニュアンスを持っている。そのため、介護現場では、BPSDと判断した途端に援助・支援を放棄してしまうという事態がしばしば生じていることが問題視されて

¹ 同志社大学心理学部 (Faculty of Psychology, Doshisha University)

いる(山口, 2018)。

このような動向を受けて, 近年, 欧米では, 認知症の研究・実践領域において, BPSD という用語ではなく, 「チャレンジング行動」(behaviors that challenge, or challenging behaviors) という用語を使うようになってきている。このチャレンジング行動という用語は, 1990年代から, 知的障害あるいは発達障害の研究・実践領域において, 問題行動に替わる用語として使用されるようになり, 日本では「挑戦的行動」と訳出されてきた(たとえば, 園山・野口・山根・平澤・北原(2001)など)。

しかし, 日本の認知症の研究・実践領域において, このチャレンジング行動(あるいは挑戦的行動)という用語は, ほとんど浸透していない。おそらく, このような状況が続いているのは, 日本人にとって, 「問題行動」という用語ではなく, あえて「チャレンジング行動」という用語を使わなければならない理由があまり理解できないことによるものであることが考えられる。なぜなら, 日本語の(外来語としての)「チャレンジ」という語は, ①そもそも「問題解決」のニュアンスを含んでおり, ②「問題解決」という語に「当該の問題がより困難で, 主体者の積極的な関与が必要なもの」というニュアンスが付加されただけのものであるようにみなされるからである。

そこで, 本稿は, 1) このチャレンジング行動の用語に対する理解の難しさを, “challenge” という英語の語源まで遡って検討し, かつ2) 対人援助領域で, 「チャレンジング行動」が使用されるようになった経緯を検討することで, 3) 認知症のBPSDに対する介入において, 「チャレンジング行動」が含意するパラダイム・シフトの核心を明確にすることを目的とする。

Challenge という英語から考える 「チャレンジング行動」

たとえば, 日本語の「私はエベレスト(山)に挑戦した」という文章を英訳しようとした場

合, 日本人(日本語を母語とする者)の多くは, 以下のような英文を思い浮かべやすい。

I challenged to climb Mt. Everest.(※)

しかし, 上記のような英語表現は不適切(意味不明)である(上記の※印は, 非文を表す)。上記の日本語を英訳するのであれば,

I undertook to climb Mt. Everest.

I made an attempt to climb
Mt. Everest.

となり, challenge という語を使用しない。ピーターセン(1999)によれば, このような間違いは, 日本人によく見られるものであるとしている。さらに, その誤用が生じる理由として, 日本語と英語が必ずしも(一対一に)対応していないという認識が脆弱であることを指摘している。その説明箇所を以下に引用する(ただし, 下線は著者によって付加された)。

何かに挑戦する(あるいは「チャレンジすること」)が, “to challenge (something/ someone)” ではないとしたら, どういう英語で表現できるのだろうか。根本的なレベルで言えば, 英語の to challenge は, 「挑戦すること」ではなく, 「挑戦へと誘いかけること」である。だから, マラソンと参加者との関わりを他動詞 challenge で表現するなら,

The marathon **challenged** the runners.
(そのマラソンは, 参加者には試練だった。)

となる。つまり, “challenge” と「チャレンジする」とは, 主体が逆である。(pp.3-4)

(中略)

また, 次のような使い方もよく見かける。

The United States Olympic Team
challenged the gold medal.

これは決して「アメリカのオリンピック・チームが金メダルに挑戦した」という意味ではない。実際、1998年10月23日の *New York Times* 紙にこんな見出し文があった。

U. S. May Seek to Challenge East German Medals (米、東独のメダル破棄を要請する)

1968-88年の間、東ドイツの選手が国家の公式プロジェクトで、定期的にステロイドなどの禁止薬物の投与を受けていたことがはっきりしてきたので、アメリカのオリンピック委員会は、その選手たちの試合結果を取り消すべきだ、と公式に訴える予定だという記事である。

この to challenge は、物事の「事実」や「正当性」などを疑った場合、相手に立ち向かって異議を申し立て、非理を決定するための「対決」を申し込むことである。「挑戦者」という意味の challenger (チャレンジャー) も、この使い方から生まれた。つまり、昔、王位の「正当性」を疑って「今の王は国王であるべきじゃない。国王であるべきなのは、この俺なんだ」と、異議を申し立て、この問題を解決する「対決」を申し込む人がしばしば現われ、そうした、冠をかぶってみたい人を “a challenger to the throne” と言ったのだ (challenge の語源は「誹謗」である)。(pp.5-6)

語源については、『シップリー英語語源辞典』(Shipley, 1945 梅田・眞方・穴吹訳 2009) を用いて再確認してみたところ、以下のような記述となっていた。

challenge は、ラテン語 calumnia (難癖、策略) が語源で、古スペイン語 calona, 古フランス語 calonge を旅して中英語 chalenge, calenge として借用された。元の意味は同語源の calumny (誹謗、中傷) に残っている。語形の変化とともに語義も変わっていったが、英語での最初の意味は「非難」であった。昔は非難に対する返答が決闘であることが多かったことから「決

闘の申し込み」(challenge) の意味となった。(p.139)

以上の説明を要約すると、① “challenge” という英語は「挑戦する」という意味ではなく「挑戦へと誘いかける」という意味である、そのため、②英語の “challenge” と日本語の「チャレンジする」とでは主体が逆転する、また③ “challenge” の語源は「非難、誹謗、中傷」であり、派生して「物事の『事実』や『正当性』などを疑った場合、相手に立ち向かって異議を申し立て、非理を決定するための『対決』を申し込む」という意味となった、となるだろう。

以上の “challenge” という語の意味のみから考えれば、「チャレンジング行動」とは、①「行動」そのものが主体となる (なぜなら、“The marathon challenged the runners.” の用法から分かるように、“challenge” は、無生物主語 (擬人化) をとることが可能だからである)、②その行動は「誰か」に何らかの対応を迫るものである、③その「誰か」とは、当該の行動を生起させた本人、およびその行為が生起した場面に居合わせた他者である、という内容を含むことになるだろう。

学術的な「チャレンジング行動」という用語の含意

それでは、学術的な「チャレンジング行動」は、どのような定義になっているだろうか。本節では、その定義に関する検討を行うこととする。

Emerson & Einfeld (2011) は、チャレンジング行動という用語が使われるようになった経緯と、その定義について述べている。「チャレンジング行動」の使用は、1990年代から、北アメリカにある重度障害児・者学会 (The Association for People with Severe Handicaps) によって推進された。その学会は、障害を社会的障壁として捉え、障害をもつ個人の権利擁護を実証的に推進することをポリシー

としている学会であった。そして、「チャレンジング行動」という用語は、当時、すでにスティグマとして機能していた、abnormal, aberrant, disordered, dysfunctional, maladaptive, and problem behaviorといった用語の「代替」としての使用を意図されたものであった。Emerson (1995) による「チャレンジング行動」の定義は、以下のようなものであった。

culturally abnormal behavior(s) of such an intensity, frequency or duration that the physical safety of the person or others is likely to be placed in serious jeopardy, or behavior which is likely to seriously limit use of, or result in the person being denied access to, ordinary community facilities. (p.44)

(文化的にノーマルではない行動、たとえば、その強度、頻度、あるいは持続時間がノーマルでないために、本人や周囲の人の身体的な安全を著しく損なわせてしまうかもしれないような行動のことである。あるいは、そのような行動があるために、通常地域にある施設の使用を著しく制限(その行動を生起させた本人の出入りが拒否)されてしまうような程度のものである；著者訳による)

というものである。この定義のポイントは「チャレンジング行動は、社会的に構成・構築されたもの(a social construction)である」という認識を強調することであった。つまり、「その行動がチャレンジングなものであるか否かは、特定の社会的な文脈に依拠する(つまり、先験的に(最初から、絶対的に)問題であるという行動は存在しない)」という考え方を強調する含意があったのである。

さらに、Emerson & Einfeld (2011) では、チャレンジング行動が社会的に重要な意味を持

つようになるか否かは、2つの要因の交互作用によって決定される、としている。その要因とは、①社会的にマイノリティの人たち(たとえば、障害を持っている人たち)がチャレンジング行動(と呼ばれるもの)を生起させるということ、②そのチャレンジング行動は、多くの場合、ネガティブな個人的結果と、ネガティブな社会的結果を生み出してしまうということである。つまり、上記のチャレンジング行動の定義から考えれば、①の要因は不可避である(マイノリティという社会的なポジションであるが故に、チャレンジング行動(とみなされるもの)を生起させざるを得ないからである)。しかし、②のネガティブな社会的結果の程度が大きい場合には、結果的に、虐待、不適切な処遇、あるいは社会的な排斥、剥奪、系統的な無視を生み出し、さらにマイノリティが先鋭化するという悪循環さえ引き起こしかねないのである。その一方で、ネガティブな社会的結果の程度が小さい場合には、①のチャレンジング行動が無効化される(その行動がチャレンジングなものともみなされなくなる)、という好循環を生み出すことも可能となるわけである。

認知症のBPSDと「チャレンジング行動」

まず、Ovid[®]という文献検索エンジン(Journals@Ovid Full Text September 28, 2018, PsycARTICLES, PsycARTICLES Full Text, そしてPsycINFO 1806 to September Week 4 2018, の4つを選択した)を使って、2018年10月1日に、Multi-Field Searchという方法で、以下のような検索を実施した。その検索とは、①タイトルに、“dementia (認知症)”, “challenging”, “behavior”という3つの単語をすべて含むもの、②タイトルに、“dementia”, “challenging”, “behaviour”という3つの単語をすべて含む文献、③タイトルに、“dementia”, “behaviour that challenge”という4つの単語をすべて含む文献、④タイトルに、“dementia”,

“behavior that challenge” という4つの単語をすべて含む文献、⑤タイトルに、“behavioral psychological”, “challenging”, “behavior” という4つの単語をすべて含む文献、⑥タイトルに、“behavioral psychological”, “challenging”, “behaviour” という4つの単語をすべて含む文献、⑦タイトルに、“BPSD”, “challenging”, “behavior” という3つの単語をすべて含む文献、⑧タイトルに、“BPSD”, “challenging”, “behaviour” という3つの単語をすべて含む文献、であった²。その結果は、重複件数を除いて、①10件、②20件、③7件、④1件、⑤-⑧はともに0件であった。また、①の文献の90%が2010年以降に公刊されたもの、②の文献の90%が2005年以降に公刊されたもの、③と④の文献のすべてが2010年以降に公刊されたものであった。以上の結果から、認知症のBPSDの研究において、チャレンジング行動という用語が使用されるようになったのは、約10年前であり、米国系雑誌よりも英国系雑誌で使用され、その件数は非常に限定的である、という傾向が明確になった（ただし、上記と同じ方法を用いて検索したところ、BPSDという用語をタイトルに含む論文数は119件であった）。つまり、認知症の研究分野では、「チャレンジング行動」という用語が少しずつ浸透してきてはいるものの、BPSDの「代替」として使用されているというレベルには達していない、ということが言えるだろう。

上記のような現状において、“dementia”, “challenges”, “behaviour” という3つの単語をすべて含んだタイトルの書籍が2011年に公刊されている。それが、Ian Andrew Jamesによる“*Understanding behavior in dementia that challenges: A guide to assessment and treatment*”（邦訳のタイトルは『チャレンジ行動から認知症の人の世界を理解する——BPSDからのパラダイム転換と認知

行動療法に基づく新しいケア——』）である。この書籍は、現時点までで、学術雑誌に5件のブックレビューが掲載され、一定の注目を集めている（この第2版が2017年に公刊されている；James & Jackman, 2017）。

James (2011) による「チャレンジング行動」の定義からの示唆

上述のJames (2011) では、チャレンジング行動を、どのように定義しているだろうか。その定義は、James (2011) の冒頭で、以下のよう記述されている。

For the purpose of this book, behaviours that challenge (BC) are defined as actions that detract from the well-being of individuals due to the physical or psychological distress they cause within the settings they are performed. The individuals affected may be either the instigators of the acts or those in the immediate surroundings. (p.12)

（本書では、challenging behavior（チャレンジング行動）の定義を、「そうした行為が生じている場面において、その行為が身体的、あるいは精神的苦痛の原因となり、人々のウェルビーイングを損なう行為」とします。その被害者となる人は、行為の主体である本人と、本人に直接かかわる周りの人たちの両方が含まれます；山中訳, p.1)

James による定義の原文と山中らによる邦訳を比較してみると、原文では“challenging behavior”ではなく、“behaviours that challenge (BC)”という表記が使われている。第2版の原文でも、やはり“challenging behavior”ではなく、“behaviours that challenge (BtC)”のままであり³、James自身が、この表記に何らかの「思い入れ」を持つ

² イギリス英語の「行動」は、behaviourと綴り、アメリカ英語では、behaviorと綴ることに注意されたい。

ていることをうかがわせる。

なぜ、彼は、“behaviours that challenge” という表記に「思い入れ」があるのか。おそらく、それは、**当該の行動が「主体」である（擬人化的な用法）**、ということを読者に意識させるためではないだろうか。なぜなら、上記の定義の第2文にも、わざわざ「その被害者となる人は、行為の主体である本人と、本人に直接かわる周りの人たちの両方が含まれます（原文に即して訳出すれば「その影響を被る人たちは、当該の行為を生起させた張本人の場合もあるし、その場に居合わせた人たちの場合もある）」という補足説明を加えているからである。これは、本稿の最初の節で検討した“challenge”という英単語の使われ方（つまり、無生物主語を用いた擬人法）からすれば納得いくものであると言えよう。一方、英語を母語としない日本人には、このような「行動そのものが主体である」というニュアンスが理解しにくいかもしれない（そのため、山中の日本語訳では、原文にはない「challenging behavior（チャレンジング行動）」という表記が一貫して使用されているのではないだろうか）。

次に、Emerson (1995) による「チャレンジング行動」の定義と、James (2011) の定義を比較してみよう。当該部分のみを比較すると、Emerson (1995) の定義の方が、権利擁護的な（マジョリティー-マイノリティの二項対立的な）側面が色濃く出ている、と言えるかもしれない。一方、James (2011) の定義の方が、三者関係（当該の行動-本人-周囲の人たち）の可能性を含んでいる、とも言えるだろう。

さらに、James (2011) は、この定義の直後のパラグラフで、以下のようなことも述べている（ただし、“BC”とは“behaviours that challenge”の略語である）。

・BC are problematic behaviours that

cause difficulties for the person performing them, or for the settings in which they are displayed.

- ・ What is perceived to be ‘challenging’ will differ between settings, with some onlookers being more tolerant than others. For this reason, the term ‘BC’ is viewed as a ‘social construct’.
- ・ They often reflect some form of need that is either driven by a belief (e.g. the person thinks she needs to collect her children from school) or is related to distress (e.g. signaling or coping with discomfort/boredom).
- ・ BCs have multiple causes, and the neurological impairment associated with dementia is just one of numerous factors.
- ・ Categorisation systems have been developed in order to group similar forms of behaviour into meaningful units. These groupings have formed the basis of treatment strategies.
- ・ Owing to the complexities involved in treating chronic BCs, treatment protocols are useful management guides. (pp.12-13)

(・BCとは、その行為を遂行する人、あるいはその行為が生じる場面に対して、困難の原因となる問題行動である

- ・「チャレンジング」であるときみなされるかどうかは、場面によって異なるし、その場にいる人の寛容さの程度によっても異なる。このような理由で、‘BC’という用語は「社会に構成・構築されたもの」とみなされる
- ・それはしばしば、何らかのニーズを反映している。そのニーズは、ある思い込み（たとえば、その人は、自分の子どもを学校に迎えに行く必要があると考えている）によって引き起こされたり、苦痛（たとえば、不快や退屈を知らせようとしたり、対処しよ

³ James & Jackman (2017) では、“behaviours that challenge”の略語は、“BtC”という表記が使用されている。

うとしている)と関連したりしている

- ・BCはそれぞれ、多様な原因がある。認知症に関連する神経学的な障害は、それらの多くの原因のうちの一つに過ぎない
- ・行動の類似性に基づいて有意なユニットに群分けするために、カテゴリー化のシステムが開発されてきた。このような群分けの作業によって、トリートメント方略の基礎が形成されてきた
- ・慢性化したBCを対処することの中には非常に複雑に絡み合った事柄が含まれているため、トリートメントのプロトコルが有益なマネジメント・ガイドとなる；著者訳による)

以上のような補足説明によって、James (2011) の定義は、Emerson (1995) による「チャレンジング行動」の定義と、さらに類似していることが理解できよう(たとえば、BCを「社会的に構成・構築されたもの」とみなしたり、原因の多様性を認めたりしている点など)。さらに、James (2011) では、チャレンジング行動の機能的な分類によって、効率よくトリートメントができるような工夫や体系化に向けた作業との関連が自覚化されている。この点については、チャレンジング行動の約20年の研究知見の蓄積によるものであることが推察できる。

以上より、本節を簡潔に要約するならば、James (2011) の「チャレンジング行動(ただし、BC)」の定義は、① Emerson (1995) による「チャレンジング行動」の定義を基本的に継承しているものの、②「当該の行動(擬人化されたもの)―本人―周囲の人たち」という「三者関係」も含まれている点だが、Emerson (1995) の「援助者―被援助者」という二項対立的な権力的構造を含意する定義とは、質的に異なるものである可能性が高い、ということになるだろう。

結 語

James & Jackman (2017) では、“challenging behavior”という用語は、時間の経過とともに、診断的なラベルに随してしまい、その結果として、スティグマ化していき、不適切な対応の「温床」となりつつあることを指摘している。そして“behaviours that challenge”という用語も、同様の「運命」を辿る危険性があるとも述べている⁴。

もちろん、そのような危機があるとしても、「チャレンジング行動」、特に“behaviours that challenge”は、BPSDと呼ばれる症状を扱う(介入、援助を含む)場合には、当該の行動を「主体」として(擬人化して)焦点化し、認知症の人と、その周囲の人たちが、協働して取り組む課題と捉えることが、パラダイム・シフトの核心である(Baer, 1976)と言えるのではないだろうか。そして、この核心部分を延命していくために、必要に応じて概念デバイス(その状況をどのように概念化するかということ)を更新していきながら(村井, 2018)、そのパラダイム・シフトを具体化・実効化していくことが今後さらに必要であると考えられる。

引用文献

- Baer, D. M. (1976). The organism as host. *Human Development*, 19(2), 87-98.
- Emerson, E. (1995). *Challenging behaviour: Analysis and intervention in people with learning disabilities*. Cambridge: Cambridge University Press.

⁴ James (2011) の “・BC are problematic behaviours that cause difficulties for the person performing them, or for the settings in which they are displayed.” の文章は、James & Jackman (2017) では、“・BC are behaviours that cause difficulties for the person performing them and/or for the settings in which they are displayed.” となっている。つまり、James & Jackman (2017) では、BC (BtC) を「問題行動とみなさない」ことが強調されている。

- Emerson, E., & Einfeld, S. L. (2011). *Challenging behaviour* (3rd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.
- Finkel, S. I., & Burns, A. (1999). *BPSD: Consensus statement*. International Psychogeriatric Association.
- James, I. A. (2011). *Understanding behaviour in dementia that challenges: A guide to assessment and treatment* (2nd ed.). London: Jessica Kingsley Publishers. (ジェームズ, I. A. 山中 克夫 (監訳) (2016). チャレンジ行動から認知症の人の世界を理解する——BPSDからのパラダイム転換と認知行動療法に基づく新しいケア—— 星和書店)
- James, I. A., & Jackman, L. (2017). *Understanding behaviour in dementia that challenges: A guide to assessment and treatment* (2nd ed.). London: Jessica Kingsley Publishers.
- Luiselli, J. K., & Cameron, M. J. (1998). *Antecedent control: Innovative approaches to behavioral support*. Baltimore: Paul H. Brookes Publishing Co. (ルイセリー, J. K.・キャメロン, M. J. 園山 繁樹・野口 幸弘・山根 正夫・平澤 紀子・北原 侑 (訳) (2001). 挑戦的行動の先行子操作——問題行動への新しい援助アプローチ—— 二瓶社)
- 村井 俊哉 (2018). 精神医学の概念デバイス 創元社
- ピーターセン, M. (1999). 心にとどく英語 岩波新書
- Shipley, J. T. (1945). *Dictionary of word origins*. New York: Philosophical Library Inc. (シップリー, J. T. 梅田 修・眞方 忠道・穴吹 章子 (訳) (2009). シップリー英語語源辞典 大修館書店)
- 山口 晴保 (2018). BPSD の定義, その症状と発症要因 認知症ケア研究誌, 2, 1-16.